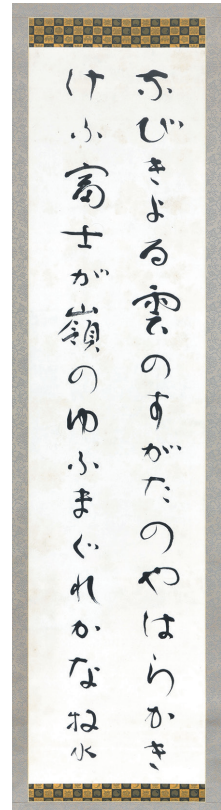


沼津市 若山 牧水 記念館

第71号 令和5年9月1日 編集・発行 公益社団法人 沼津牧水会 TEL・FAX 055-962-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 http://web.thn.jp/bokusui/



なびきよる雲のすがたのやはらかき けふ富士が嶺のゆふまぐれかな 牧水

大正九年八月十五日に一家を挙げて沼津へ移住してきた牧水は、ひと月くらいは移住の疲労で妻の喜志子ともども半病人のように寝たり起きたりを繰り返していたようだ。秋になり、疲労も少しずつ回復して、作歌もできはじめてきており、九月には一週間ほど東京に滞在した。

十月九日、午前中は原稿を書いていたが、うまく書けず、書き損ねの原稿用紙が膝の横に堆くなるのみで、ついに諦めて早寝にするように家人に催促し、晩酌用の酒を取り出してちびちび飲み始めていると、次第に旅心が生じてきて、富士南麓の裾野大野原を歩いてみたくなり、思い立って旅に出ることになった。沼津に来てから最初の旅である。午後一時、牧水は東海道線（現在の御殿場線）の沼津駅を出発して、三島駅（現在の下土狩駅）を経て御殿場に降り立ち、雨の中を、裾野の須山を目指して歩き、清水館に泊まった。翌十日は快晴に恵まれ、十里木まで歩いて、その村にただ一軒あるという茶店に泊めさせてもらい、十一日、終日西へ歩きつづけて、富士宮の大宮町へ着いた。

この旅のことは、『静かなる旅をゆきつつ』所収の「富士裾野の三日」に詳しく記されている。牧水がこの旅で詠んだ短歌は、第十四歌集『山桜の歌』の「大野原の秋」に九首収められている。掲載した半切の短歌は、その中の最後の一首で、そのほかの短歌は以下の八首である。

富士が嶺や裾野に來り仰ぐときいよよ親しき山にぞありける
富士が嶺の裾野の原の真広きは言に出しかねつただにゆきゆく
富士が嶺に雲は寄れどもあなかしこわがみてをればうすらぎてゆく
大わだのうねりに似たる富士が嶺の裾野の岡のうねりおもしろ
穂すすきの原まひわたるつぶら鳥うづらの鳥は二つならびとべり
つつましく心なりゐて富士が嶺の裾野にまへるうづら鳥見つ
富士が嶺の裾野の原のくすり草せんぶりを摘みぬ指いたむまでに
富士が嶺の裾野の原をうづめ咲く松虫草をひと日見て来ぬ

なお、大正十一年六月に再度大野原を訪れた牧水は、「大野原の初夏」と題する二十七首を『山桜の歌』に載せている。表掲の半切は、田中旭沼津牧水会初代事務局長の妹・石井敏子様の孫の石井一平様から寄贈していただいた。

牧水とからだの歌 大森 静佳

あるとき、牧水の身長が一五六センチだったというのを知ってとても驚きました。私は一六〇センチなので、もし二人で向かいあつたら牧水を見おろすことになるのです。

もちろん日本人の平均身長は男女それぞれ今とはずいぶん違ったでしょう。でも、たとえば石川啄木や斎藤茂吉が仮に自分より小柄だったとしてもそれほど驚きはありません。牧水の歌を読んでいると、自然を見つめる視線のスケールの大きさはもちろん、おおらかに動く腕や太腿、ふくらはぎなどが見えてくる感じがします。全体として



左から『海の声』『路上』『死か芸術か』『秋風の歌』『くろ土』『黒松』

も何となくゆつたりと大きなへからだを思い浮かべていたので、事実とのギャップに驚いたのででした。

古典和歌ではほとんど登場しないへからだの部位をあらわす言葉。身体感覚によつて世界とながる歌を開拓した歌人といえば、まずは与謝野晶子を思い浮かべます。女性側のへからだの代表が晶子だとすると、男性側の代表は牧水になるのではないのでしょうか。そのくらい、牧水には身体感覚が印象的な歌、そして直接身体の部位が歌に出てこなくても、たとえば動詞のちからが大きく働いて「動き」が見える歌が多いと感じています。

樹に寄りて頬をよすればほのかにも頬に脈うつ秋木立かな 『海の声』

樹の幹にほつたを寄せると、樹がかすかに脈を打つ音が感じられたという、樹との交歓が親密な一首です。実際には自分の鼓動がどきどきしていたのかもしれないけれど、樹は生き物だという思いがあるから、こういう感受のしかたになるのでしょうか。とりたてて恋愛云々、恋人云々とは書いていないのですが、何となく淡い恋の気分が漂っているような気がします。答えのない物思い

に沈んでいる感じでしょうか。「頬」ほのかに「頬」と、息の音ゆたかな「ほ」の頭韻も魅力的です。

かれ草のなかに散りたる櫛の葉をひろはむとして手のさびしけれ 『路上』

次も秋の歌です。山歩きをしていたのでしょうか、枯れ草のなかに落ちていたの櫛の葉を拾おうとした。そのときふと、手が寂しかったと言うんですね。私たちは寂しさはふつう心で感じるものだと思います。こんでいるので、「手のさびしけれ」は感覚の出し方として新鮮ではつとさせられます。葉っぱを拾ってから寂しさを感じるのではなく、拾う一瞬前の「手」の渴きをとらえているところが、繊細で目を引きまします。しんとした秋の気配。手が寂しいから、ふつと自然な流れで葉っぱを拾ったのでしょうか。その感覚や感情を頭のなかで組み立てず、あくまで体感に沿って言葉にしていることが、この「ひろはむとして手のさびしけれ」という語順から伝わります。

白玉の歯にしみとほる秋の夜の酒はしづかに飲むべかりけれ 『路上』

のちに結句は「飲むべかりけれ」に改作されたのですが、有名な歌ですね。お酒はひとり静かに思いを巡らせながら飲むとうとうとところに気分を中心はあるのですが、よく読んでみると上の句も面白いのです。ふつう、お酒の味や温度は舌あるいは喉で感じると思うのですが、牧水は「歯」に

沁みとおると言うんですね。まるで雨のしずくが岩肌に沁みこむように、透明な酒の一滴一滴が真つ白な歯に沁みていく。上の句の感覚の冴えがあるからこそ、下の句の箴言しんげんがより鮮やかに決まっているのだとも思います。

身揺らば青き岬もゆれやせむ昼の月浮くさびしき海に
『死か芸術か』

次はこちら、三浦半島を訪れ、昼の月が浮く海辺で青々とした岬を見つめている場面です。自分からだを揺すつたら、あの青い岬も揺れ動くだろうかと、この上の句は動きがとても面白いですね。どこか子どもの発想のようなシュールさもあります。自分の視界が揺れたらそれはもちろん岬も揺れるでしょう。でも歌のなかでこういう発想をする背後にはやはり、自分のからだと周りの世界が繋がっている、続いているという前提があるように思います。

ひたひたと濤なみはわが頬をなめて過ぐ船室の窓に怒るわが頬を
『秋風の歌』

次も海の歌です。これは上の句だけ読むと、波が「頬をなめて過ぐ」なので海で泳いでいる場面なのかと一瞬思うわけですが、下の句まで読むと一転、自分は船室にいて、その窓ガラスに映った自分の姿を窓の外の波が舐めていく場面だったとわかります。しかも、「われ」はこのとき怒っていたんですね。その怒った顔を波があやすよう

に舐めてゆくという捉え方。波がまるで生き物のような感じもします。「なめて過ぐ」はあくまで窓ガラス越しの見立てにすぎないのですが、牧水は身体感覚からだの外にまで延ばし、自分の「頬」が波に舐められる感覚を想像力によって体感していたのではないのでしょうか。表現によってなまなましさが出ています。

行き行くと冬日の原にたちとまり耳をすませば日の光きこゆ
『くろ土』
走り過ぐる霧に声ありわれを包みて渦巻けるなかにその声聞ゆ
『黒松』

一首目は群馬県のみなみ町のあたりで詠まれた歌です。歩いていくうちに、冬の寒々しい景色のなか、そこだけ陽だまりのようになった原っぱがあつて立ちどまった。そして耳を澄ませると「日の光」、太陽の光が聴こえたというんですね。日の光を、眼で見るとはなく耳で聴くというのです。視覚と聴覚が混ざった不思議な感覚なのですが、目をつむってもあたたかい太陽を感じることはできるように、私たちが何かを感じるときというのは、本来は視覚も聴覚も分離されてはいなくて、もつと五感の混ざりあつた全体で感じとっているのかもしれない、といったことを考えさせられます。

最後の歌集『黒松』から引いた二首目も少し似ていて、霧のなかを行くときに自分を包み込んで渦巻く霧の「声」を聴いたと言うんですね。霧が

何らかメッセージを送ってきたという意味ではなく、もつと感覚的なもの、霧の濃厚な気配とか、霧に包まれたときのあの不思議で不穏な感覚を「声」と直感的に表現したのではないかと思えます。「日の光きこゆ」の歌もこの「霧」の歌も、それ以外何も述べていないところが良いですよ。何か自分の気持ちや思想、メッセージ、観念などを述べるために自然を利用するのではなく、ただ自分と自然が一对一でここにあること、その尊さだけを詠んでいる。その潔さ、清らかさが牧水の歌の魅力の一つでもあると思います。

次に、牧水以後ということで、現代の歌人のなかで特に身体感覚が特徴的な歌人にも少し触れてみたいと思います。



左から『寒気氾濫』『雨』『歩く』『歳月』

樹は内に一千年後の樹を感じくすぐったくて
ならない春ぞ 渡辺松男『寒気氾濫』

樹はみずからの内側に千年後の樹の存在を感じている、そして春になると、その生命力の予感のようなもののせいで、樹はくすぐったくてしょうがない。なかば自分が樹になりかわったような身体感覚を詠んでいて、さきほどの牧水の「樹に依りて」の歌をちよつと思ひ出したりもします。自分が生きて、世界を感じているという身体感覚がゆたかであれば、ときにその感覚は自分のからださえも超えて延びていきます。

えーえるえず、ゆめではなんと自由です、牧水の脚で洪峠こゆ 渡辺松男『雨る』

「洪峠」は長野と群馬の県境で、牧水は大正九年の五月に草津からこの洪峠を越えたそうです。「えーえるえず」はひらがななので不思議な印象を受けますが、作者が抱えている病気のことで、ね。現実には思うように身動きがとれないけれど、夢のなかではとても自由で、牧水の脚を借りて洪峠を越えたりもする。「牧水の脚で」が思い切った表現で魅力的ですね。脚だけをちよつと借りているようにも読めるし、でも「洪峠」という地名から牧水が実際にそこを歩いたという歴史的事実を思いもするので、主体が夢のなかで大正九年にタイムスリップしたようにも読めて不思議な味わいです。歌の表現によって、時間や空間を超える

ことができる。病が背景にありせつないのですが、同時にとてもユニークな一首です。この歌人の特徴でもありますが、文語と口語の混在具合にもどこかなまなまとした身体感がある気がします。

さいさいと雨戸にあたりて降る月光耳に感じをり家内は暗い 河野裕子『歩く』

この歌は牧水が「日の光」を耳で聴いたというのと近い感覚が詠まれています。夜、月光を耳に感じている。けれど牧水の歌と違うところは、自分分は部屋の中にいるので月は目に見えてさえないんです。電気をつけず暗い家のなかで、研ぎ澄まされた聴覚や体感によって外の月の光の気配を感じとっている。「雨戸にあたりて」も、月の光をそれこそ雨つぶのように物質的に捉えていて印象的な表現です。

一粒づつぞくりぞくりと歯にあたる泣きながらひとり昼飯を食ふ 河野裕子『歳月』

何かつらいことがあって、ひとり泣きながら昼ごはんを食べている場面です。上の句、ごはんつぶだと思おうのですが、その一粒一粒が「ぞくりぞくりと歯にあたる」というのは、異様なほど感覚が過敏で、忘れたい一首です。悲しみを突き抜けたところで呆然として、全身の意識が歯に集中してしまっている感じでしょうか。「ぞくりぞくり」というちよつと嫌な感じのオノマトペで心理を表しています。

あくがれと寂しさは一枚のコインの表と裏と言つていいだろう。大きな宇宙と自然の中に生きるいのちの有限性の痛切な自覚がそのコインに輝きを与えている、と牧水作品を読んでいると思えてくる。

岩波文庫『若山牧水歌集』の「解説」(伊藤一彦)より引用しました。私たちの命がもしも無限であり、永遠に死ぬことのないからだであつたとしたら、窓の外の青空や木々を「美しい」と感じるかどうか。そんなことをときどき考えます。いつか死ぬ者の眼で世界を見て、いつか死ぬ者の耳で世界を聴く。そのことはもちろん寂しいけれど、「いのちの有限性」を自覚した寂しさによって、人間の身体感覚は冴え、外へと延びていくのかもしれない。ひきつづき、牧水をはじめ近代歌人のへからだの歌を広く読みこんでいこうと思います。

「筆者プロフィール」 おおもり しずか



平成元年、岡山市生れ。京都市在住。高校時代に短歌と出会い、「京大短歌会」を経て「塔」短歌会に所属、現在、編集委員。平成二十二年、「硝子の駒」にて第五十六回角川短歌賞受賞。第一歌集『てのひらを燃やす』で、第三十九回現代歌人集会賞、第二十回日本歌人クラブ新人賞、第五十八回現代歌人協会賞をそれぞれ受賞。第二歌集『カミーユ』で第十二回日本一行詩大賞を受賞。その他の歌集に『ヘクター』。歌書に『この世の息 歌人・河野裕子論』がある。令和五年三月四日に開催した第三十五回「雛の歌会」に、講師としてお越しいただいた。